

日米の低湿地遺跡の発掘調査方法に関する覚え書き

—文学研究科プロジェクト経費『日米の共同発掘調査による大学院生の人材育成プロジェクト』調査報告

大塚友恵

考古学専門 博士前期課程1年

はじめに

近年、日本考古学においてはその国際化が課題となっている。あらゆる局面で国際化が進展する社会において、日本考古学も日本国内だけではなく海外研究会での研究成果の発表が求められてきている。そのため、これから日本考古学においては国内だけでなく世界全体の研究動向を的確にとらえ、また英語発表に耐えうる語学力をもち国際社会に対応できうる研究者が求められている。

1. プロジェクトの目的

本稿は、「日米の共同発掘調査による大学院生の人材育成プロジェクト」で実施された活動内容、その成果について報告するものである。

本プロジェクトは、日米両国の調査方法の共通点と相違点を認識し、違いが生まれている背景を考究し、また英語能力の向上によって国際的に活躍できる人材育成を目的としている。

本プロジェクトではデール・クローエス氏が実施するワシントン州クックアス遺跡の発掘調査への参加が予定されていたが、今年度はクックアス遺跡の発掘調査が急遽中止になったため、日米共同の民族考古学的調査に変更した。

2. 現地調査概要

現地調査はアメリカ北西海岸のワシントン州の遺跡や博物館を見て回った。2010年7月17日から7月27日までの移動日含め10日間の日程で実施された。以下、プロジェクトの全日程である。

- 7月17日 出国
- 7月18日 ホコ遺跡群見学
- 7月19日 カヌージャーニー参加
- 7月20日 ワヤッチ村、スーザース村訪問

マカーニュ文化調査センター見学

7月21日 オゼット遺跡見学

7月22日 カヌージャーニー参加

マカーニュ文化調査センター見学

7月23日 スパニッシュフォート見学

7月24日 カヌージャーニー参加

7月25日 移動日

7月26日 クックアス遺跡見学

7月27日 帰国

本稿では実際に訪れたホコ遺跡群やクックアス遺跡、カヌージャーニーについての概要を述べた上で、現地調査での体験を踏まえて日米の考古学的調査の相違という観点から考察をしていく。

3. アメリカ北西海岸における発掘調査事例

3-1. ホコ遺跡群

ホコ遺跡群は、アメリカワシントン州の北西部、クララム郡に位置する約2500年前の漁労遺跡を中心とした遺跡群である。

当遺跡は、1967年にその存在が知られ、その後試掘調査が行われた。近年の北米の発掘調査では、埋土を除去するためにシャワーを用いるのが一般的となっているが、このホコ遺跡群の試掘調査はシャワーによる発掘調査の最初の事例であり、その後のオゼット遺跡の調査などにおいてもこの方法が用いられている（この方法の詳細については5-1に後述する）。1977年から1989年には、サウス・ヒュージェットサウンド・コミュニティカレッジのデール・クローエス氏らによって発掘調査が行われ、木製品やバスケットなど約5000点もの遺物が出土し、大きな成果を得ている。

ホコ遺跡群は湿地遺跡、乾地遺跡、洞窟遺跡の3遺跡からなり、湿地遺跡、乾地遺跡は約3000から2500年前、洞窟遺跡は約900から100年前と推定されている。

湿地遺跡からは、バスケットや縄類など多くの有機



写真1 ホコ川に浸食されたホコ遺跡

質遺物が良好な保存状態で出土しており、遺跡全体の遺物組成のうち約80パーセントが有機質遺物であった。このことより、当時は植物が盛んに利用されていたことが推測される。

ホコ遺跡群には、マカーチ族の祖先が居住していたと想定されている。マカーチ族はアメリカ北西海岸のワシントン州ニアベイ周辺に定住するネイティブアメリカンの部族で、太平洋岸に集落を形成し、クジラやアザラシなどの海獣類や様々な魚介類を主食とする漁労民であった。約3800年前からニアベイ一帯に集落を形成していたが、1855年に条約が締結され、現在ではマカーチ族保護地区内だけでのみ伝統的な捕鯨が許可されている。

洞窟遺跡は我々が滞在していたヤート前海岸沿いに、乾地遺跡と湿地遺跡はヤート南東方向よりのびるホコ川を少しきかのぼったところにあった。乾地遺跡と湿地遺跡はホコ川沿いに面しているためカヤックとボートで移動した（写真1）。

ホコ川の両岸にはバスケットグラスという植物が大量に自生しており、簡単に採取することができた。このバスケットグラスの葉を2つに裂き、乾燥させたものがバスケットを編むために使われたそうである。ホコ遺跡群ではこのバスケットグラスを素材とするバスケットの出土が報告されており、数千年前にこの地に居住していたマカーチ族も同じようにバスケットグラスを使用してバスケットを編んでいたことが明らかとなっている。このバスケットグラスはホコ遺跡群周辺だけでなくオゼット遺跡周辺など様々な場所で見ることができた。

また、ホコ遺跡群周辺の海岸に沿いには海藻類が大量に漂着しており、これらも容易に採取することができた。様々な種類の海藻類があったが、なかでもボルケルプと呼ばれる海藻は、ネイティブアメリカンによって釣り糸として使用されていたようである（写真

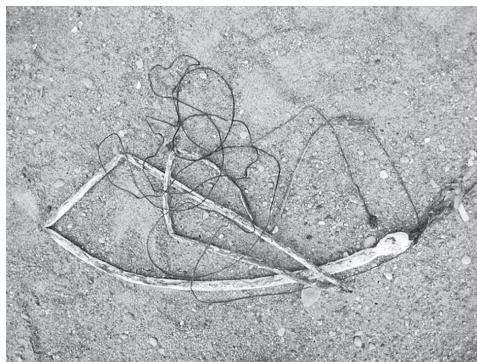


写真2 ボールケルプ

2）。このボルケルプは繩のように頑丈な海藻であり、また海岸沿いで大量に採取できることから釣り道具として非常に適した素材だったのであろう。現存の自然環境をみても、当遺跡周辺は多種多様な植物・海藻類に恵まれており、それらがここに居住するネイティブアメリカンの生活にとって重要な役割を担っていたことが容易に想像できる。

3-2. クックアス遺跡

クックアス遺跡（写真3, 4）はオリンピア近くのマッドベイに位置する、約1000年から500年前の集落



写真3 サケを捕獲するためのヤナ
(クックアス遺跡)



写真4 クックアス遺跡にて
(写真右から2人目がデール・クローエス氏)

遺跡で、スクアクシン族というネイティブアメリカンが居住していた。当遺跡は低湿地遺跡であり、有機質遺物の残存率が非常に高く保存状態が良好なものが多く検出されている。

当遺跡の発掘調査は、デール・クローエス氏を中心に行なわれている。クックアス遺跡の発掘調査にはホコ遺跡群やオゼット遺跡と同様に川から水をひき、シャワーによって泥を除去していく方法が採用されている。現在発掘調査は行われていなかったが、発掘調査時に川から水をひいてくるために使用するホースや土壤を選別するための篩などを確認することができた。

4. 北西海岸におけるネイティブアメリカン

4-1. カヌージャーニー

カヌージャーニーはアメリカ北西海岸のネイティブアメリカンのお祭りで、数多くあるネイティブアメリカンの部族のうち一部族が主催者となり毎年開催されている（写真5）。2010年度はマカー族を主催者としてニアベイで開催された。我々は7月19日、22日、24日の計3日間参加した。ネイティブアメリカンだけではなく多くの一般の人がこのイベントに参加しており、非常に熱気のあるイベントであった。

このカヌージャーニーに参加し、第一に北西海岸におけるネイティブアメリカンの社会が、狩猟採集民族といえども縄文時代と異なり階層社会であることを実感した。カヌージャーニー期間中には各部族によってプロトコルと呼ばれるダンスや歌などの儀礼が行われており、その際に部族各々の民族衣装を身にまとっていた。それらを観察すると、各部族の首長は笠の上に突起をもつ特殊な帽子を被っていたり、首長者一族は派手な衣装を身にまとっていたりなど、儀礼の際の衣装にも階層が見受けられた。ホコ遺跡群からも同様の突起のある帽子が発見されており、縄文時代の社会とは異なり3000年前からすでに階層化した社会だったのでないかと推測されている。また、マカー文化調査センターに展示してあったオゼットの復元住居でも、首長者一族と平民の住居は別棟で、住居内では首長者一族は個室空間で生活していた一方、その奴隸は土間で寝起きするといった状況であった。

狩猟採集民であるネイティブアメリカンの比較考古学的研究や民族学的研究は、縄文時代研究において非常に有用な資料を与えるが、北西海岸のネイティブア



写真5 カヌージャーニーの様子

メリカンのように社会構造自体が異なる場合もあることを念頭におく必要があるであろう。

第二に、ネイティブアメリカンが自部族に対して強い帰属意識を持ち、自分たちの歴史について誇りを持っているということを感じた。カヌージャーニーには多くのネイティブアメリカンが参加していたが、現在では多くの人が狩猟採集民であったインディアンとは全く異なる生活をし、全く別の地に移り住んでいる。しかし多くのネイティブアメリカンが部族の祭りのために集まり、部族ごとの民族衣装を身にまといダンスや歌を披露し、熱狂する様は、ネイティブアメリカンというアイデンティティーがいかに強いかということを感じさせるものとなった。

4-2. ネイティブアメリカンの発掘調査への参加

デール・クローエス氏のご教示によれば、今回見学した3遺跡（ホコ、オゼット、クックアス）の発掘調査は、多くのネイティブアメリカンの協力のもとに行われているとのことであった。

クックアス遺跡での発掘調査にあたっては、調査側と土地の先有者であったスクアクシン族の間で発掘調査の許可、調査情報の共有などに関する取り決めがなされ、相互の理解のもと行われている。また、スクアクシン族の人々は研究者に対して多くの知識を提供し、また発掘調査自体にも多くのネイティブアメリカンが参加したことであった。

ホコ遺跡群においては、マカー族が発掘調査に参加するだけでなく、その後の調査研究にも協力している。例えばマカー族の年配者らによってホコ遺跡群から出土した釣り具を復元し、実際にそれで釣りができるのかどうかというマカー族と共同の実験考古学的研究がなされている。

5. まとめ

5-1. 低湿地遺跡の発掘調査方法の差異

木製品や繊維製品といった有機質遺物は通常の遺跡では時間の経過とともに劣化しつつ残らないが、ホコ遺跡群やクックアス遺跡のような低湿地遺跡では、遺物が空気から遮断されるため有機質遺物が良好に保存されたまま出土する場合が多い。北米の低湿地遺跡ではこれら大量に出土する脆弱な有機質遺物を傷まないようにするために、移植ごとなどではなく水圧を利用して埋土を除去して行う調査方法が一般的である。調査は水を川からくみ上げ、それをポンプやホースなどで散水することによって人工遺物を覆っていた泥などを除去して遺物や遺構を検出し、それを記録していく。遺構は、ピット内から突き出た枝葉、埋土の凹凸や堆積した土壤の色の違いなどで判断するということであった。

日本の発掘調査では、このようなシャワーを用いた発掘調査はあまり例がみられず、やはり有機質遺物の出土が多い北米での発掘調査の特徴ともいえよう。北米の遺跡で有機質遺物の出土が多い理由として、低湿地遺跡が多く有機質遺物が残りやすいということだけではなく、〈3-1.〉でみたようにネイティブアメリカンが非常に多くの植物を利用するため、植物性遺物の絶対数が多いということが考えられる。例えば日本においては食膳具や貯蔵具に用いられるのは先史時代、歴史時代を通じて土器を中心となっているが、季節で移動を繰り返していた北米のネイティブアメリカンの場合、割れやすく移動に適さない土器はほとんど用いず、非常に精巧につくられた木器を食膳具や貯蔵具、さらには調理具として使用していたようである。このようにネイティブアメリカンが高度な植物利用技術をもっていたため、植物性遺物が数多く出土するのだと考えられる。

5-2. 考古学とネイティブアメリカンとの関わり

ホコ遺跡群やオゼット遺跡、クックアス遺跡の発掘調査では、多くのネイティブアメリカンが高い関心をもち、調査に参加していた。また、アメリカの北西海岸でネイティブアメリカンの遺跡の発掘調査を行っているデール・クローエス氏はネイティブアメリカンと良好な関係を持ちお互い信頼し合っているようであった。

アメリカにおける発掘調査は、現在もその子孫が存在するネイティブアメリカンに関する遺跡の調査であ

り、カヌージャーニーでもみられたように（4-1, 4-2に先述）、ネイティブアメリカンはそれぞれ同じ世界観を共有し、自らの部族に対する帰属意識を強く持っている。それゆえ、北米考古学において遺跡の調査とその成果は考古学的研究のためだけのものではなく、そこに居住してきた先住民族との共有財産であり、ネイティブアメリカンとの相互協力と相互理解のもとに発掘調査が行われるべきであるという意識が根付いていた。この点が日本考古学の置かれている状況とは異なり、当地域の考古学的研究が現代社会と深く関わっている背景でもある。

おわりに

本プロジェクトでは現地調査を通じて日米両国の発掘調査の方法の違いとその違いが生じてくる背景、両国の調査や研究のおかれている状況の違いについて追及することができた。アメリカと日本の考古学では調査方法、地域住民との関わりなどあらゆる面で異なっており、日米の比較考古学的研究においては、現在双方の考古学が置かれている状況の差異も加味したうえで研究がすすめられていく必要性があるのではないかと考える。

今回残念ながら発掘調査に参加することができず、実際の発掘現場の様子を確認することができなかつた。しかし、ホコ遺跡群やクックアス遺跡など多くの北西海岸の遺跡の発掘調査に携わってきたデール・クローエス氏から直接お話を聞くことができ、発掘調査の方法やネイティブアメリカンとの関係など、報告書では得ることのできない話を伺うことができ非常に貴重な時間となった。

また、本プロジェクト期間中は常に英語を話す環境にあり自身の英語によるコミュニケーション能力も向上したと思われる。

謝辞

本プロジェクトにあたりまして、このような貴重な機会を与えてくださった、名古屋大学の山本直人教授に深謝致します。また、サウス・ヒュージェットサウンド・コミュニティカレッジのデール・クローエス教授には大変お世話になり、多くのことをご教授いただきました。記して感謝申し上げます。

参考文献

- Croes, Dale R. 1995 *The Hoko River archaeological site complex: the wet/dry site (45CA213), 3,000–1,700 B.P.* Washington State University Press: Pullman.
- Kirk, Ruth. and Daugherty, Richard D. 2007 *Archaeology in Washington.* University of Washington Press: Seattle and London.